

花ちゃん・オー君・モンタ博士のわくわくドキドキ国立てくてく

国立第七小学校 平成25年4月22日 NO.5

花ちゃん 「ねえ、オー君。土曜日・日曜日はとても寒かったわね。」

オー君 「そうだね。おいら寒くてダウンベストを出して着ちゃったよ。」

モンタ博士「でも、寒くてもおうちの中にもつまらないし、てくてくしてきたよ。」

花ちゃん 「え！モンタ博士！私たちをおいて、どっかにお出かけしちゃったんですか。」

オー君 「モンタ博士！一人でお出かけしちゃいけないよ。おいらたちも連れてってよ。」

モンタ博士「ごめん、ごめん。今度はいっしょに行こうね。」

花ちゃん 「ところで、モンタ博士！どこをてくてくして来たの。」

モンタ博士「玉川上水（たまがわじょうすい）という所さ。やわらかな緑の林が帯（おび）
のようにつらなっていて、ちょっと寒かったけど、とても気持ちよかったよ。
やさしい緑の色合いのトンネルをてくてくして来たんだ。」

花ちゃん 「いろいろなお花が咲いていましたか。」

オー君 「いろいろな虫もいましたか。」

モンタ博士「そうだね。お花は咲いていたけど、虫は寒かったせいか、少なかったね。」

本当は『国立てくてく』したかったんだけど。友達が玉川上水を案内してく
れと言ったのでね・・・。」

オー君 「あーあ。おいらも行きたかったな。」

モンタ博士「まあ、そんなに遠くに行かなくても、まわりをあちこち見てごらん。わくわ
くドキドキはいっぱいあるよ。」

オー君 「でも、サクラは終わったし。」

モンタ博士「それじゃ、ちょっと来て。」

ということで、モンタ博士は、
花ちゃんとオー君を連れて
学校の門（先生達の入る門）
の所まででてくてくして、西側を指さし・・・。





ハナミズキ (ミズキ科)

Benthamidia florida

By *k.morita*

(南武線谷保駅前がきれい)

モンタ博士「さあ！よく見てごらん。道の両側（りょうがわ）にお花がさいているね。」

ハナミズキの街路樹(がいろじゅ)だ。ハナミズキ通りと名付けようかなあ。」

花ちゃん「ハナミズキがいっぱいきれいですね。今まであまり気がつかなかったわ。」

オー君「ハナミズキ……。何か歌の題名にあったような気もするなあ。」(歌：一青窈)

モンタ博士「さあ、よく見てごらん。緑色がとてもやさしい感じがするだろう。それに、

純白(じゅんぱく)の花がとてもステキで、モンタ博士も好きな木だよ。」

オー君「ふーむ。きれいな花だけど、白い花は緑の葉っぱのおかげでよく目立つね。」

モンタ博士「え！オー君。今なんて言ったの。オー君は、今、とてもすごいことに気がつ

いているんだよ。」

緑とやすらぎ感について

人は自然にやすらぎを求めるものだ。品田穰氏の著書「ヒトと緑の空間」によると、安らぎ感の主役は木や草の緑だという。視界に入る緑の量が多ければ多いほど、人々の安らぎ感が増すという事が調査で確かめられている。

昔の人はよく、「緑を見ると目が休まる」といったものだ。読書や針仕事に疲れると、庭の木々に目をやり、目の疲れを癒し心を休めた。緑の量とやすらぎ感とは正比例の関係にあるようだ。

東大の吉田尚貴氏、武蔵野美大の立花直美氏は、街路樹の緑が多ければ多いほどやすらぎ感がますと報告している。つまり、視界の中の緑の量が30%以下になると安らぎ感が失われ殺伐とした風景になるそうだ。人類はもともと目を使って緑を見つけ、緑を食べる動物として進化した。だから人間の目には、自然の緑がもっともよく見えるような構造が組み込まれているのかもしれない。自然の緑に適應するようにつくられているのだろう。緑が目の薬になる秘密はこのへんにあるのかもしれないなあ。